

令和3年度

平泉町内遺跡発掘調査報告会資料

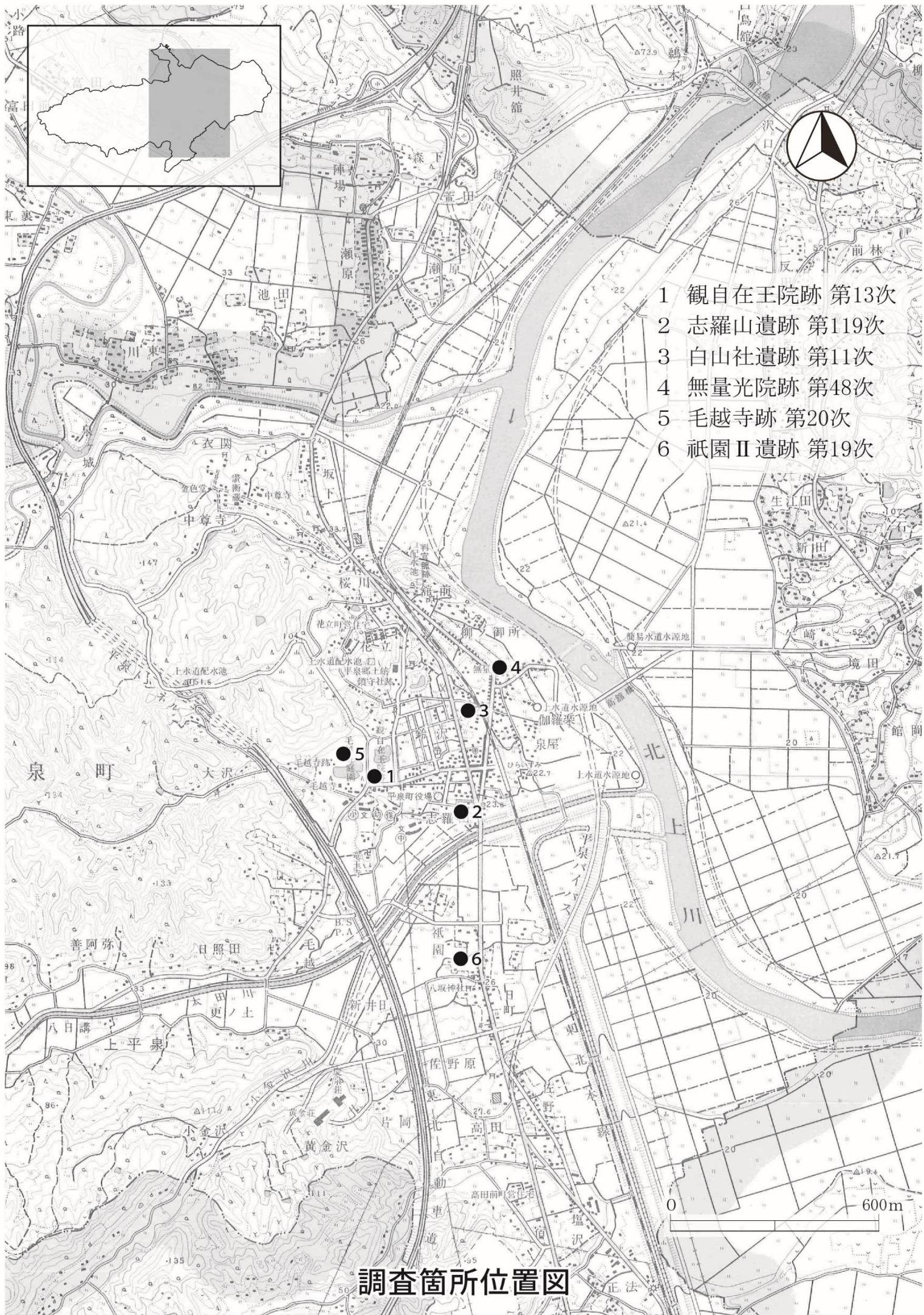


平泉文化遺産センター

一目次一

今年度調査箇所位置図

1. 觀自在王院跡第 13 次発掘調査	2
2. 志羅山遺跡第 119 次発掘調査	4
3. 白山社遺跡第 11 次発掘調査	6
4. 無量光院跡第 48 次発掘調査	8
5. 毛越寺跡第 20 次発掘調査	10
6. 祇園Ⅱ遺跡第 19 次発掘調査	12



1. 観自在王院跡第13次調査

鈴木江利子、島原弘征

1. はじめに

観自在王院跡は、奥州藤原氏二代基衡の夫人が建立した寺院の跡で毛越寺の東隣に位置しています。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安部宗任の娘）が建立したこと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したこととが記されています。

境内の大きさは南北250m、東西120mで、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂と呼ばれるお堂の跡があり、その南側には舞鶴が池と呼ばれる大きな園池があることが、昭和29~31年、昭和47~52年の調査で確認されています。昭和49~53年度に史跡整備が行われましたが、整備完了から40年が経過し老朽化が進んでいるため、修復を目的とした再整備を行うこととなり、再整備に必要な情報を得るため平成30年度から発掘調査を再開しました。

2. 調査の概要

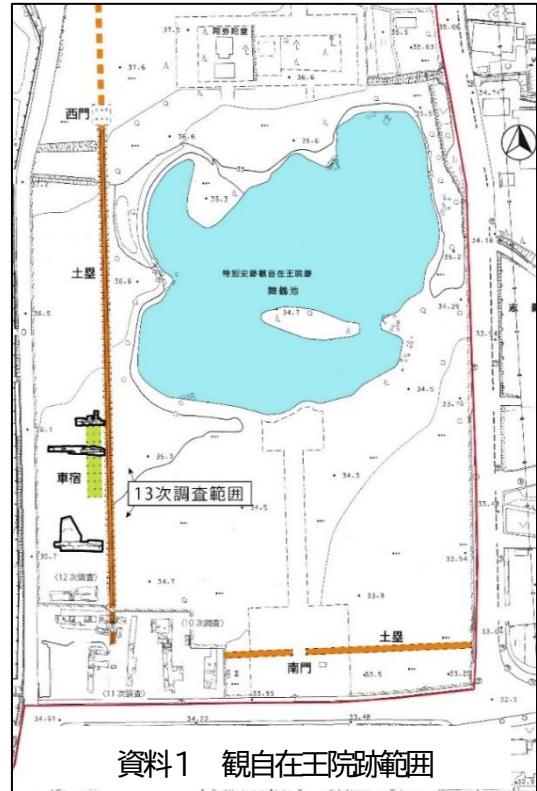
今年度の調査は、観自在王院西側で接する道路跡を対象に行いました。調査予定地は玉石敷の整備がされていますが、車宿（くるまやどり）周辺以外は未調査の部分もあるため、遺構面の確認を目的に部分的な調査を行いました。

（1）車宿の調査

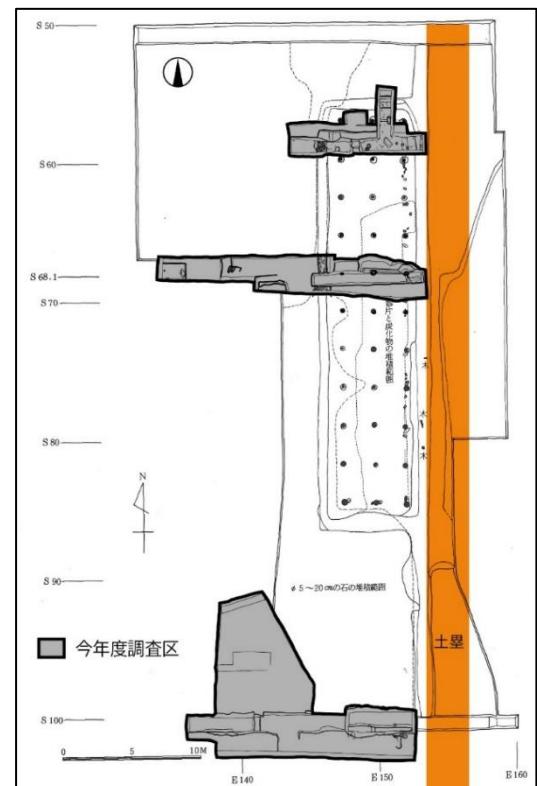
『吾妻鏡』には、「観自在王院の西面には南北方向に並ぶ數十字の車宿がある。」と書かれており、昭和52年の調査では東西4.6m（2間）、南北方向27.5m（10間）と南北方向に細長く、牛車10台分の車宿が確認されています。今回の調査では北から5番目の柱（S68.1 ライン）の調査を行い、柱の状況を確認しました。

資料2 車宿の範囲と今年度調査区との重ね図

平泉町1979 『観自在王院跡整備報告書』に加筆



資料1 観自在王院跡範囲



<検出面>車宿は12世紀の整地層で確認しました。この整地層上面では車宿廃絶以降に堆積したと考えられる「かわらけ」と炭の層が広がっており、廃絶年代を考える上で鍵となる層です。

<柱の規模>柱を立てるために掘った「掘り方」は径1m、深さ90cm程ありました。柱の太さは直径30cm程あり、太くて堂々としており、前回の調査ではヒノキ材と報告されています。礎板の痕跡はありませんでした。

<雨落溝>調査区北側では車宿の西側に伴う雨落溝を確認しました。溝の大きさは幅70cm、深さ10cm程あり、西側の雨落溝では15cm位の石が埋まっていました。前回調査において車宿の周囲を廻っていた状況が確認されています(資料3左)。

(2) 石敷

毛越寺と観自在王院との間にある南北方向の道路は、昭和52年の調査で石敷が施されていることが確認されています。今回の調査でも部分的に確認を行いました。道路に伴う石敷は調査区全域で確認していますが、観自在王院の整備以前に水田として土地利用されていたため、耕作によって石が失われている箇所も多く、残存状況に濃淡がありました。確認した範囲では、整地の上に3~15cmの石が広がっていました(資料5)。

(3) 出土遺物

再調査のため、出土遺物は非常に少なく、僅かにかわらけが出土しました。

4、まとめ

今回は、約40年ぶりに車宿周辺の発掘調査を行いました。車宿の柱は径30cmと太く、残存状況は良好で柱の通りも良いことを確認しました。周囲に雨落溝が巡り完結していることや、『吾妻鏡』の記載から車宿と考えていますが、毛越寺、観自在王院に隣接するのに相応しい重厚な車宿と思われます。

道路面の調査では石敷について再測量を実施することができました。道路面の高さを含め再整備にむけて必要な資料を得ることができました。



資料3 調査区北側の様子



資料4 車宿の確認状況



資料5 石敷の様子

2. 志羅山遺跡第119次調査

菅原計二

概要

調査地点は平泉町役場の南東約100mに位置する住宅地で、太田川左岸の南に開けた沖積台地の緩斜面にあたります。平成5年(1993)に北隣りで行った調査で井戸の底から中国産白磁水注がほぼ完全な形で出土しました。これまでの調査で、この周辺には奥州藤原氏時代の屋敷地が広がっていたと考えられます。当地点は盛土が厚く被っていたため部分的な深掘り調査を行い、柱穴や溝跡などが見つかりました。

検出遺構

北側の標高が高い地山面で柱穴20個、一段低い面で昭和40年代以前の水田跡、南側で近世以降の溝跡1条が見つかりました。

手づくねかわらけ(小皿)が出土した柱穴は12世紀の掘立柱建物跡の可能性があります。区画整理以前の水田は地形に沿った段々で小さな区画だったことが分かりました。

出土遺物

遺物の量は少なく、柱穴から12世紀のかわらけ、溝跡からは渥美産陶器片や煙管の雁首などが出土しました。



志羅山遺跡第119次 調査区全体（南から）



調査区北側の遺構検出（西から）



調査区北西側の柱穴（西から）



南側の1号溝完掘（北西から）



てづくねかわらけ（柱穴2出土）



渥美産刻画文陶器とキセルの雁首（1号溝出土）



※かわらけと陶器は12世紀、キセルは近世以降とみられる遺物

3. 白山社跡第11次調査

菅原計二

概要

調査地点はJR平泉駅の北約400mの地点で、白山社跡と無量光院跡の間を通る町道の南側に位置しています。白山社跡は奥州藤原氏時代の鎮守社の一つと推定されていて、平成4年(1992)の第3次調査では池の玉石積み護岸跡や橋脚が見つかり、12世紀の池跡を伴う遺跡であることが分かりました。今回の調査では掘立柱建物跡1棟を含む柱穴35個、溝跡1条、土坑1基、焼土遺構1基、東側で集石1箇所が見つかりました。

検出遺構

掘立柱建物跡は12個の柱穴で推定される建物跡です。東西3間(5.6m)・南北2間(3.4m)で西側に庇が付くようです。焼土遺構の埋戻し土から12世紀のロクロかわらけ(小皿)や常滑産陶器片が出土しました。掘立柱建物跡の柱穴が焼土遺構を掘り込んでいることから12世紀以降の建物と思われますが、出土遺物が無く詳しい年代は分かりません。他の柱穴は近年の物置に関わる穴で、土坑も新しい様相でした。溝跡は町道と並行し、古い側溝かも知れません。東側で検出した集石は用途不明です。

出土遺物

遺物の量は少ないですが1号溝から国産陶器、1号焼土遺構からロクロかわらけと常滑産陶器片、遺構外から中国産白磁皿の小片が出土しました。



調査区全景(南西から)



掘立柱建物跡の柱穴と焼土遺構のくぼみ（北東から）



焼土遺構断面とかわらけ（南東から）



焼土遺構出土のかわらけ



調査区東側の集石（北西から）



口クロかわらけ（1号焼土遺構出土）

4. 無量光院跡第48次発掘調査

鈴木江利子

概要

無量光院跡東端で住宅建設に先立ち発掘調査を行いました。周辺では無量光院造営時の整地層とともに、無量光院跡以前の築地塀や羽口、鉄滓、瓦などが見つかっています。

検出遺構

溝跡4条、柱穴25個、土坑（落とし穴）2基などが見つかりました。土坑は、獲物を捕るための落とし穴と思われ、埋土の状態から12世紀より古いと思われます。溝跡、柱穴は12世紀と近世のものが混在していますが、南東端の溝（5号溝）からはかわらけ、瓦の破片が多く見つかりました。無量光院跡の東側では、他の地点よりも瓦が多く見つかる傾向があり、特徴の一つと言えます。

調査区の両端では溝や柱穴が見つかりましたが、中央や北側は後世に大きく掘削されて、柱穴などの遺構は残っていませんでした。

出土遺物 かわらけがコンテナ3箱、瓦がコンテナ箱半分程、他に鉄滓や羽口が出土しました。



調査区全景（北から）



写真2 5号溝(南西から)
幅1.7~1.9mで、深さ70cm、見つかった長さは4mで、底は北に向かって低くなっています。この溝からは、かわらけや瓦の破片が多く出土しました(写真3・4)。



写真3 5号溝「かわらけ」出土状況
かわらけは、大半が破片で見つかりましたが、溝の底の方では形の分かるものも見つかっています。



写真4 5号溝から見つかった瓦
瓦は5号溝の上層から多く出土しました。破片でもろいものがほとんどでした。

5. 毛越寺跡第20次発掘調査

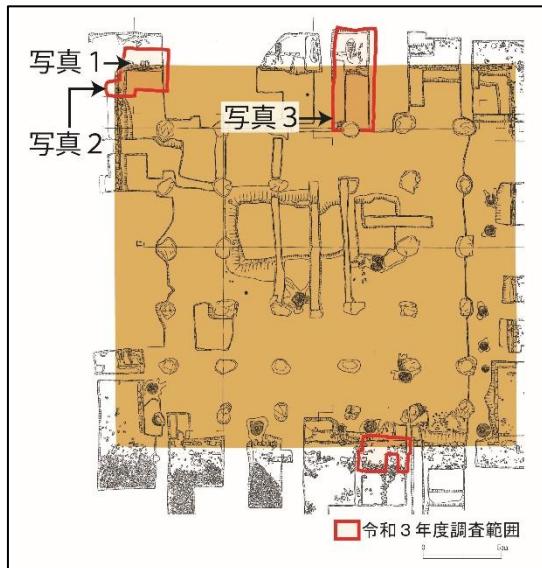
鈴木江利子、島原弘征

概要

毛越寺講堂跡は大泉が池の北側にあるお堂跡ですが、当時の建物は無く、建物の基礎である基壇と柱を支える礎石が残っています。講堂跡は昭和32・33年に一度発掘調査が行われており、基壇の外側が木製の羽目板で囲われた「木装基壇(もくそうきだん)」であることが分かっています。将来の修理に備えて当時の基壇の位置や残存状況を確認するための調査を令和3年10月から11月にかけて行いました。

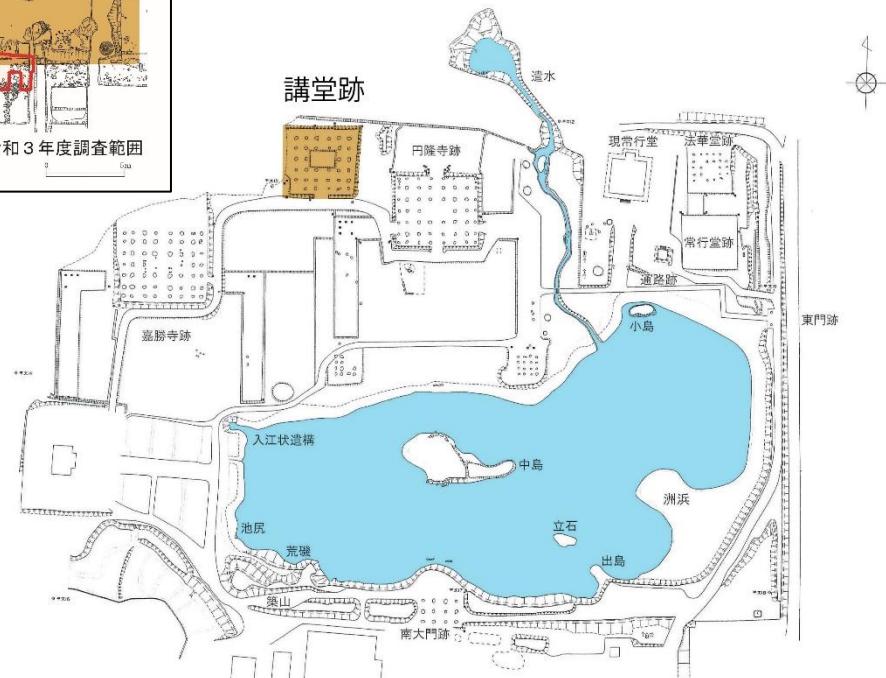
調査では①お堂を囲む雨落ち溝、②木製の羽目板(はめいた)や地覆(じふく)などの基壇を覆う部材、③基壇の造り方等を確認しました。

出土遺物 再調査のため出土量は少なかったですが、かわらけ・白磁片が出土しました。



左図／毛越寺講堂跡の平面図

藤島亥治郎編 1961『平泉 毛越寺と観自在王院跡の研究』に一部加筆



毛越寺講堂跡の位置



写真1 北西部 雨落溝（西から）

写真中央に厚い板に切られた石を2列に並べており、石の間に屋根から落ちる雨水を受けて流していました。右側の石がお堂の基壇側面にあたり、左側が外側にあたりますが、崩れているため位置が乱れています。さらに外側には細かい石が敷かれていました。



写真2 北西部 基壇を覆う部材（西から）

北西側で基壇の覆う部材の様子を確認しました。基壇側面の下に角材（地覆）を置いて、その上に長方形の板（羽目板）を縦に乗せて囲んでいました。大半は腐って無くなっていましたが、下側の方だけ残っています。



写真3 北側中央 磂石と基壇の様子（西から）

基壇は石混じりの土を積み上げて高く盛って、その上に柱を支える礎石が据えられていました。

基壇の高さ（厚さ）は90cm程あり、その上に長さ1m、厚さ40cmを超えた大きさの礎石が据えられていました。

6. 祇園Ⅱ遺跡第19次調査

鈴木江利子

概要

調査地点は、平泉の南方鎮守である祇園社と伝わる八坂神社から北西約200mに位置します。周辺の過去の発掘調査では、八坂神社の参道に関係すると思われる東西方向の道路側溝や、四面に庇を持つ大型の建物跡など、12世紀と考えられる遺構が見つかっています。今回の調査では12世紀より古い落とし穴が見つかっています。

検出遺構

今回の調査区は、周辺の水田よりやや高い位置で、直前まで杉の木が立ち並んでいました。そのため調査箇所には今回ばかりではなく数回にわたって木を伐採、抜根した跡が数か所にあります。また、風で根ごと倒された風倒木の跡も見つかっています。

見つかった遺構は獲物を捕まえるための落とし穴で、東側と南西側で各1か所見つかりました。南西側の落とし穴は1.3m程で、南側は調査区外に続いています。東側の落とし穴の大きさは4.1mで北の調査区外に続くようで幅は1m程度あり、深さは40cm前後です。

出土遺物 かわらけ細片、須恵器甕片、近世磁器が出土しました。



調査区全景（南から）

〈 MEMO 〉

⟨ MEMO ⟩

